

All-on-X による即時荷重は無歯顎インプラント補綴の標準治療と言えるか？

Can immediate loading with All-on-X be considered the standard treatment for edentulous implant patients?



Ryuji Hosokawa

細川 隆司

九州歯科大学口腔再建リハビリテーション学分野

医療において、標準治療という用語がよく使われるようになってきている。国立がん研究センターによると、標準治療とは、科学的根拠に基づいた観点で、現在利用できる最良の治療であることが示され、ある状態の一般的な患者さんに行われることが推奨される治療のこと、と定義されている。では、無歯顎症例において、インプラントで機能回復を図る場合に、標準治療と呼べるのはどのようなものだろうか？

無歯顎症例におけるインプラント治療の長期安定性を得るためには、適切な埋入手術による確実な骨支持の獲得とともに、患者の顎口腔機能の特性に応じた上部構造の選択・設計が極めて重要と言える。治療のゴール設定が不十分であれば、治療全体が不確かなものになり、場合によっては患者にとって不幸な治療結果に直結する。無歯顎症例においては、いわゆる All-on-X と呼ばれる治療方法（4本から6本のインプラントをグラフト無しに埋入しプロビジョナルレストレーションを即時に装着し強固に連結する術式）が広く用いられるようになってきた。しかし、これが第一選択の治療方法（いわゆる標準治療）であるというコンセンサスは、現状では得られていないように思える。

インプラント治療においては、患者のQOL向上がもっとも望まれるアウトカムであることから、患者の希望、ライフスタイル、経済状況などを十分に考慮しながら治療方法が選択されるべきであるが、歯を全て失った症例に対して一般的に最も望ましいインプラント治療（インプラントの本数、荷重時期、上部構造の設計など）について、現在においてもコンセンサスが得られていないという状況は、歯科医師にとっても患者にとっても大きな問題と思われる。

本講演では、最新のエビデンスをもとに無歯顎症例における標準治療についての見解を述べさせて頂くとともに、超高齢社会における歯科補綴治療介入のあり方などについても私見を述べさせて頂き皆様のご批判を頂ければと考えている。

【略歴】

- 1986年 九州歯科大学歯学部卒業
- 1989年 日本学術振興会特別研究員 DC
- 1990年 九州歯科大学大学院歯学研究科修了
- 1990年 ハーバード大学歯学部研究員
- 1991年 九州歯科大学歯学部助手
- 1995年 広島大学歯学部助手
- 2001年 広島大学歯学部附属病院講師
- 2003年 九州歯科大学教授、附属病院口腔インプラントセンター長
- 2012年 九州歯科大学歯学部長
- 2016年 九州歯科大学附属病院副病院長
- 2020年 九州歯科大学副学長